

👁️👁️ みどころ

日本弁護士連合会の機関紙のタイトルは「自由と正義」だが、本作のタイトル『銃弾と正義』とは一体ナニ？また、本作のテーマは“エンカウンター(＝特例射殺)”だが、それって一体ナニ？

本作導入部に見る、インドのスーパースター・ラジニカーントによる歌と踊りをバックにした“エンカウンター(＝特例射殺)”の華麗なる姿は大問題！人権派の老判事の登場とその厳しい指摘を待つまでもなくそれは明らかだから、“特例射殺”の論点は幅広いうえ奥深い。

本作の本格的ストーリーは、アディヤンによる女教師レイプ殺人事件の犯人への特例射殺から始まるが、真犯人は別にいることが判明すると・・・？

後半からは、「NAT 学院」なるインドの大手進学塾が政治家ズブズブのみならず、殺し屋ズブズブの悪どい経営実態にあること、それが女教師レイプ殺人事件に至る動機になったことが、地道な捜査によって明らかになるから、さあそこで再度“特例射殺”が！？いやいや、猿でも反省できるのなら、インドのスーパースターが猛反省した結果は・・・？

■□■2人のインドの超重量級スーパースターが激突！■□■

中国映画を一躍世界に有名にしたのは、1980年代のチャン・イーモウ（張芸謀）監督の『紅いコーリャン（紅高粱）』（89年）（『シネマ5』72頁）と、チェン・カイコー監督の『黄色い大地』（84年）（『シネマ5』63頁）だ。それと同じように、インド映画を一躍世界に有名にしたのは、1990年代の『ムトゥ 踊るマハラジャ』（95年）（『シネマ43』未掲載）のシリーズと2010年代の『バーフバリ 伝説誕生』（15年）（『シネマ43』未掲載）、『バーフバリ 王の凱旋』（17年）（『シネマ41』141頁）シリーズだ。『バーフバリ』シリーズの

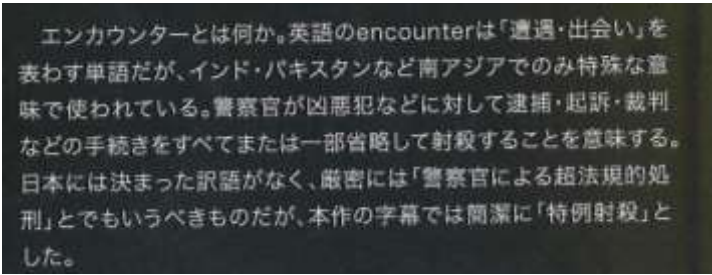
主役はプラバースだが、マハラジャのシリーズの主役は“インドのスーパースター” ラジニカーントだ。

そんなラジニカーントも 1950 年生まれだから御年 75 歳だが、本作では「銃弾と正義」というタイトルにふさわしい「エンカウンター＝特例射殺」というキーワードへの意欲的な取り組みのほか、インドのスーパースターの名に恥ない“華麗なるアクション”を見せてくれるので、それに注目！

他方、『マダム・イン・ニューヨーク』（12 年）（『シネマ 33』38 頁）、『華麗なるギャツビー』（『シネマ 31』76 頁）、『パッドマン 5 億人の女性を救った男』（『シネマ 43』199 頁）等に出演しているアミダブ・バッチャンは、1942 年生まれのベテラン俳優だが、本作では「エンカウンター＝特例射殺」というテーマをめぐる、ラジニカーント扮する警視アディヤンの対極に位置する人権派判事役で主役級の出演を！本作では、そんなインドを代表する 2 人の超スーパースターの激突に注目！

■□■ “エンカウンター（＝特例射殺）” って一体ナニ？ ■□■

「先の大戦」前後の明治憲法と現行憲法は根本的思想が異なっているが、それと同じように、刑事訴訟法も戦前のそれと戦後のそれとは根本的思想が異なっている。その最たるものは、「自白は証拠の王」とされていた考え方が一変したことだ。また、憲法でも刑事訴訟法でも基本的人権が尊重されたため、戦前の“特攻警察”は姿を消したし、逮捕にも厳重な適正手続きを必要とすることになった。また、警察官の銃の発砲についても厳重な要件が課せられている。本作のテーマである“エンカウンター（＝特例射殺）”について、パンフレットには次のように解説されている。



エンカウンターとは何か。英語のencounterは「遭遇・出会い」を表わす単語だが、インド・パキスタンなど南アジアでのみ特殊な意味で使われている。警察官が凶悪犯などに対して逮捕・起訴・裁判などの手続きをすべてまたは一部省略して射殺することを意味する。日本には決まった訳語がなく、厳密には「警察官による超法規的処刑」とでもいうべきものだが、本作の字幕では簡潔に「特例射殺」とした。

そんなバカな！日本ではありえない、そんな制度がインドにあるの？パンフレットには、この“エンカウンター（＝特例射殺）”についてさらに詳しい解説があるし、深尾淳一氏の ESSAY『インドにおける「エンカウンター」をめぐる省察』があるので、それをしっかり勉強したい。

■□■ 導入部は“特例射殺”万歳！それに人権派判事が大反発！ ■□■

本作は 161 分の長尺だが、その舞台はインド南部のタミルナードゥ州の最南端のまち・カニヤクマリ県。冒頭でのカニヤクマリ署の警視アディヤン（ラジニカーント）によるド

派手な“エンカウンター（＝特例射殺）”のお披露目を終えた後の導入部では、若い女性教師サランニャ（ドゥシャラー・ヴィジャヤン）の“勇氣ある告発”を受けたアディヤンがドラッグの流通を仕切る悪人を“特例射殺”し、世間から大絶賛される姿が描かれる。しかし、人権派の判事サティヤデーヴ（アミダーブ・バッチャン）がその手法に反発し疑義を唱えたところから、本作の論点が明確に提示されてくることに。

他方、州都チェンナイの学校への転勤希望がかなったサランニャが生き生きと働き始めたにもかかわらず、ある日1人で学校内に残っていた彼女が性暴力を受けた上、惨殺されるという事件が発生するから、アレレ、アレレ。必死に逃れていたサランニャがアディヤンに緊急の電話を入れたにもかかわらず、その時アディヤンは電話に出られなかったから、アディヤンが心に受けた傷も大きかった。模範的な女教師を襲った衝撃的な事件にタミルナードウ州全域が揺れ、犯人の早期逮捕と厳罰を求める声が満ちる中、州政府は州警察長官を急かして警察内に特捜チームを結成。特捜チームは遺留物や交信記録などからサランニャと接点があった男・グナ（アサル・コーラール）に目をつけ逮捕したもの、目を離れたわずかな隙にグナが姿を消してしまったから、アレレ、アレレ。そんな警察の面目丸つぶれの事態に、警察長官は特例でアディヤンに捜査を任せることに。さあ、そうすると、またしてもアディヤンがカッコよくグナに対して特例射殺を！

■□■特例射殺の根拠は？ずさんな捜査が露わになると！？■□■

極悪犯を極刑に、そんな声は古今東西同じだから、裁判での極刑は死刑と相場が決まっている。ところが、今や死刑廃止を求める国の方が多くなっているのは一体なぜ？それを考えれば「特例射殺」の是非は自ずから明らかだが、その必要性に絶対的な自信を持っていたアディヤンにとっても、自らが凶悪犯として特例射殺をした男・グナについてのずさんな捜査が明らかになり、「真犯人は別川にいた！」との確信が強まってくると・・・？しかし、アディヤンが今更グナの特例射殺を悔やんでも、死んでしまったグナは戻ってこない。そして、後に残されたグナの母（ヴァーサンディ）と妹（タンマヤ）に対していくら謝罪をしても、死んだグナが戻ってくるわけではない。すると、誤った特例射殺をしたことのせめてもの反省と、死亡したグナへの供養として、アディヤンはサランニャのレイプ殺人事件の真犯人を逮捕することだ。そう確信したアディヤンのその後の行動は？

■□■インドの教育は？NAT 学院の役割は？■□■

中国の教育制度としての高考（ガオカオ）は有名だが、中国以上の人口を持ち、中国以上に数学力がすごいと言われるインドの教育事情は？その高等教育のあり方は？本作後半からは、突如登場してくる NAT 学院なる“教育塾”とその CEO ナタラージ（ラーナー・ダググバーティ）が登場し、教育大臣たち、政治家ともズブズブの関係で進められるインドの歪んだ教育制度と塾制度の問題点が暴露されていくので、それに注目！

関西では大手有名塾である浜学園が有名だが、私はそこから希学園が分離独立するについて発生した「不正競争防止法違反」等々の事件を受任し、訴訟では全て勝訴するとともに

に、その後、希学園の顧問弁護士に就任しさまざまな相談を受けてきた。したがって、日本の教育制度や塾制度、塾の経営に関するさまざまな体験をすることができた。しかし、本作にみる NAT 学院のような“教育を金儲けのネタ”とした上、その目的達成のためには政治家と結託したり、あまつさえ殺人集団とも結託する姿には唖然。これはあくまで映画上の話で、インドの現実の教育上の姿、塾経営の姿とは思いたくないが・・・。

■□■女教師レイプ殺人事件の真犯人は？警察の名誉挽回は？■□■

グナが生きていれば彼の（弁解）話を聞くことによって、女教師（サランニャ）レイプ殺人事件の真犯人に近づけたかもしれない。しかし、グナは誤認逮捕された中でやっと逃走できたにもかかわらず、アディヤンの誤った特例射殺によって死亡してしまったから、まさに「死人に口なし」だ。

他方、根本からサランニャのレイプ殺人事件の捜査を見直し、誤りを正していったアディヤンをトップとする捜査陣の努力によって、NAT 学院がサランニャによって告発されていたこと、その告発の理由は NAT 学院の教育をエサとした悪どい金儲け経営にあったことが判明すると、何と、サランニャのレイプ殺人事件の真犯人は NAT 学院の CEO ナタラージから命じられた人物に違いない、と確信することに！

さあ、こうなると最後は“狩人”の異名を取るアディヤンの出番だ。単身堂々と NAT 学院の CEO ナタラージの部屋に乗り込んだアディヤンは、そこで再び特例射殺を披露することに！？

■□■また特例射殺！いやいや逮捕、起訴、有罪判決へ！■□■

本作の主演は、インドのスーパースター・ラジニカートンが演じるカニヤクマリ署の警視・アディヤン。導入部での歌と踊りをバックとした中での彼の華麗なる“特例射殺”の姿を見てみると、それだけでスカッとし、清涼剂的役割を！すると、本作ラストのクライマックスでも NAT 学院の CEO ナタラージを特例射殺で血祭りに！？

いやいや、本作はそうではない。T・J・ニャーナヴェール監督は、本作ではアディヤンに対峙する人権派の判事・サティヤデーヴを登場させ、特例射殺の是非を考えさせることに価値をおいている。その結果、アディヤンは自らの特例射殺の華麗なる経歴に固執することなく、2 度目の女教師レイプ殺人事件の捜査では、自ら先頭に立って物的証拠集めを自ら行った結果として、NAT 学院の CEO ナタラージを特例射殺ではなく逮捕にこぎつけたから、サティヤデーヴ判事も大喜びだ。

なるほど、スーパースターは 70 歳を超えても自分の誤った判断を素直に反省し、地道な捜査から再出発の上、逮捕、起訴、有罪判決にこぎつけたわけだから、偉い。本作は 161 分の長尺だが、“エンカウンター＝特例射殺”のテーマをしっかりと勉強できたことに感謝！

2025（令和 7）年 9 月 19 日記